

シンポジウム **死者のゆくえ**

7月16日(土) 14:40-17:50

司会 **渡辺和子** 東洋英和女学院大学教授
死生学研究所所長

発題1 **奥野滋子** おくの しげこ

順天堂大学医学部先任准教授

■ プロフィール

金沢医科大学医学部卒業。順天堂大学医学部麻酔科学講座講師、総合病院衣笠病院ホスピス科主任医長、神奈川県立がんセンター緩和医療科部長を歴任して、現在順天堂大学医学部附属順天堂医院がん治療センター副センター長、緩和ケア室長、先任准教授、医学博士、ケアマネジャー。その他日本麻酔科学会指導医、日本ペインクリニック学会専門医、日本緩和医療学会暫定指導医。2008年に本学大学院人間科学研究科(宗教学分野)入学。人間科学・宗教をベースとした医療の可能性を探る。

■ 主要業績

「伴侶を亡くした男性の二事例—緩和医療現場での学び」『死生学年報2011 作品にみる生と死』(ト)2011。『緩和医療医として患者から学ぶ死生観』『死生学年報2010 死生観を学ぶ』(ト)2010。『ベッドサイドのルンパ浮腫ケア』日本看護協会出版会2008(共著)。

「死んだらどうなるか」—医療現場での問い

内容紹介：ホスピス病棟に初めて出勤した日、一人の患者に「痛みの治療を専門にしています」と自己紹介したとたん、「死んだらどうなる？死ぬのは怖い？」と質問されました。死について知りたいと思っている患者は少なくありませんが、死は忌むべきものとする人も多く、実際には病床で死について語り合うことは難しいです。患者は、延命を願う家族や医療者に死について尋ねることができず、また家族や医療者は、死を話題にすることで患者が落ち込むことを恐れて口を閉ざしてしまいます。今回は死について話すことの重要性について考えてみたいと思います。

参考文献：ルドルフ・シュタイナー『シュタイナーの死者の書』(高橋巖訳)筑摩書房2006。E・キューブラー・ロス『死、それは成長の最終段階 続死ぬ瞬間』(鈴木晶訳)中央公論新社2001。柳澤桂子『生と死が創るもの』筑摩書房2010。

発題2 **高井啓介** たかい けいすけ

慶応大学言語文化研究所非常勤講師/
本学生涯学習センター講師

■ プロフィール

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程(宗教学・宗教史学)単位取得退学。2009年イェール大学大学院中近東言語文明学科博士課程修了(Ph.D.)。研究テーマ:モノタミア宗教史、イスラエル宗教史、聖書考古学。最近の関心事は我が家の猫(ミケランジェロ)の生態観察。

■ 主要業績

“Mikāb, Voive Text, and the Prayer of Hezekiah (Isaiah 38:9-20),” *Orient* 45, 2010. *Old Babylonian Letters of Petition and Later Individual Lament Prayers*, Ph.D. Dissertation, 2009, Yale University. 「シュメール・アッカド文学とヘブライ語聖書の類型比較の方法論再考」『宗教史とは何か』上、(ト)2008。

古代イスラエル社会の死者のゆくえ—その多様性

内容紹介：ヘブライ語聖書は人間が死後に赴く空間を「シェオル」と名付けます。通常死者はシェオルで生気のない影のような存在を続けると考えられていたようです。他方で、死者の霊は超自然的な能力を持つとも考えられ、その知恵や力を積極的に生者が利用しようとした痕跡も聖書の中には残っています。シェオルにおける死者の存在のこのような多様性を掘り下げて考えてみます。さらに、イスラエルの鉄器時代の墓制・葬制に関する考古学的知見も、シェオルと死者に対する古代イスラエル人の考え方をもう一つの手がかりとなるかもしれません。

参考文献：『聖書・新共同訳』日本聖書協会。E. Bloch-Smith, *Judahite Burial Practices and Beliefs about the Dead*, 1992. Ph. S. Johnston, *Shades of Sheol: Death and Afterlife in the Old Testament*, 2002. B. Schmidt, *Israel's Beneficent Dead*, 1994.

発題3 **下田正弘** しもた まさひろ

東京大学大学院人文社会系研究科教授

■ プロフィール

東京大学大学院人文科学研究科(印度哲学専門課程)博士課程修了、文学博士(東京大学)、インド仏教における経典の形成過程の解明を専門とする。

■ 主要業績

『涅槃経の研究—大乘経典の研究手法試論』(春秋社)1997。『新アジア仏教史』1-4巻(共編著、佼成出版社)2010-2011。『死と世界が照らす生』(共編著、東京大学出版会)2008。

仏のもとに生まれる

内容紹介：仏教において、死後の世界を考える際にわかりやすいテーマは「浄土」でしょう。いわゆる死後に人びとが「往生」する世界として中世以降、日本においても流布したこの概念は、インド仏教に起源をもっています。しかし実のところ「浄土」は、死後の世界に限定されているわけではなく、それは「仏の他者救済のはたらきが自由になされる場」、「他者救済の自己犠牲によって完成する場」、「時が満ちてこの世界が変ずる場」、「一瞬の心の浄化によって実現する場」といったいくつかの意味をあわせもちます。これはいったい何を意味するのでしょうか。仏教の死生観を知るうえでのキータームの一つを解明してみます。

参考文献：藤田宏達『浄土三部経の研究』岩波書店。唯円『歎異抄』金子大栄校注、岩波書店。

□ シンポジウム会場
東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□ 最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)
□ 参加費1,000円(本学院在校生・教職員無料)
□ 当日先着順100名様 □ 事前申込み不要

<予告>10月8日(土)連続講座
13:00~ 矢吹和美(本学教授)
想像力のもたらす死と再生の体験
14:40~ 久保田まり(本学教授)
対象の喪失と内なる再生—愛着の彼岸

🌸 お問合せ先
東洋英和女学院大学死生学研究所
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035 (fax専用)